

大学院教育を通じた学生・附属学校教員・  
大学教員の社会科授業力の向上  
— 中学校歴史学習の単元「四国遍路」の開発を通して —

(社会科教育研究室) 鴛原 進  
(日本史学研究室) 川岡 勉  
(社会科教育研究室) 福田 喜彦

Social Studies Teacher Training in Graduate School of  
Education

A Case of Development of History Lesson Plan in Junior High School

Susumu OSHIHARA, Tsutomu KAWAOKA and Yoshihiko FUKUDA

(平成 21 年 6 月 5 日受理)

はじめに

本研究は、大学院教育学研究科教科教育専攻社会科教育専修における授業「社会科教育実践研究」を通して、学生の社会科における授業力の育成を図るとともに、それらの授業に、大学教員のみならず附属学校の社会科教員が参画することにより、附属学校教員、大学教員の授業力の向上を目的としたものである<sup>1)</sup>。教員養成学部・大学院において学生の教育実践力の育成が求められている。ここでは、社会科における教育実践力を、授業を計画、実践、評価、改善・再構成する力、すなわち授業力ととらえている。まず、本研究はその点は到達できるものとなっている。その上に、本研究においては、学生を指導する側が、学生への指導を通して、自己の授業に対するメタ認知をし、更なる向上を意図したものである。これに関わっては、次の2つの問いが出てこよう。

「なぜ、学生の教育を核とするのか？」

まず、学生の授業力育成が教育学部教員（大学教員）の責務であるからである。また、学生の行う授業計画（教材研究）を第三者として附属学校教員や大学教員が見ることで、より客観的な自己の授業研究が可能となるからである。教材研究は、それぞれの専門性からの指導ができるので、三者が高次の授業計画の視点と方法を習得す

ることが可能である。

「なぜ、授業計画、授業実践を中心とした共同研究なのか？」

授業計画、特に教材研究は授業の第一歩であることと、社会科教師の専門性に位置付くからだ。近年、授業研究においては臨床的側面や学習方法的側面が重視されてきている一方で、本来同時に重視されるべき内容や教材の吟味が軽視される状況が生まれてしまった。教材のおもしろさと子どもの意識が結びつく授業計画、そしてそれを具現化する授業実践を、学生、附属学校教員そして大学教員が体験的に進めていくことが必要である。

1. 社会科における授業力

社会科における授業力とは、授業を計画、実践、評価、改善・再構成していく一連のプロセスを行うことができる力である<sup>2)</sup>。

(1) 授業の計画力

計画力は、授業のねらい、展開、学習活動を考案する力である。これを構成する下位の力として次の5点を指摘できる。

- ア：教科の本質・学習の本質を解明する力
- イ：目標を設定し、教育内容を開発・編成する力
- ウ：教材を解釈する力
  - 学習指導要領・教科書の理解、
  - 教材の収集・解釈・加工
  - 資料の収集・解釈・加工
- エ：指導計画を作成する力（授業構成、指導方法）
- オ：児童、社会諸科学、現実社会を理解する力

## (2) 授業の実践力

実践力は、授業計画を、有効に実行する力である。これを構成する下位の力として次の5点を指摘できる。

- ア：指導計画を実践する力
- イ：様々な指導方法を用いる力
- ウ：適切な教材・教具を選択し活用する力
- エ：児童の状況を把握する力
- オ：状況を的確に把握し、  
状況に応じて授業を展開する力

## (3) 授業の評価力

評価力は、授業を通して子どもが身に付けているものを把握し、目標の達成度を判断する力である。これを構成する下位の力として次の3点を指摘できる。

- ア：学習成果を判定し、評価する力
- イ：他人の授業を分析して評価する力
- ウ：自分の授業を分析して評価する力

## (4) 授業の改善・再構成力

改善・再構成力は、授業をより高いレベルのものにするための手立てを構想する力である。これを構成する下位の力として次の2点を指摘できる。

- ア：他人の授業を改善する力
  - 再構成する、アドバイスする、提案する力
- イ：社会科に関する様々な実践的課題を解決する力

## 2. 大学院教育における社会科授業力の育成

4つの授業力は、一連のプロセスに位置付いており、相互に関係している。それがスパイラルな状態で向上していく必要がある。

特に、社会科授業の計画力、実践力とは、授業のねらい、展開、学習活動を考案し、それを実行する力である。優れた計画をたてるためには、自分が何を教えたいのかねらいをはっきりさせ、それに最も適した授業の展開を構想し、ねらいを達成し得る学習活動を組織することが必要である。また、その計画に基づいて優れた実践を行なうためには、計画した展開に適した発問を設定したり、組織した学習活動の中で配布するよりよい資料を選択したりすることが求められる。

これらは、日々授業実践を繰り返す中で身に付けていくものであるが、ただ同じことを日々繰り返していても成長はしない。どのような優れた方法があるか、それをどうすれば実行できるかを知らなければ、自分のやり方を反省もできないし、改善もできない。

計画力、実践力の、意図的な育成が必要となってくる。そこで、大学院教育においては、計画力、実践力の育成を主眼とした教育が必要である。そのためには、大学院生に、授業を自分たちで計画し、自分たちで実践する経験が必要である。その経験こそが、計画力、実践力の育成となる。それを、社会科教育専修の必修科目である「社会科教育実践研究」において取り組んだ。

## 3. 「社会科教育実践研究」の実際

この「社会科教育実践研究」という授業は、高度な実践的能力を有する学校教育教員の養成という本研究科の目的に照らすと、社会科教育専修のコア科目と位置づけられるものである。附属中学校において大学院生の研究授業を実施することとした。

年度初め（4月）に担当教員全員と受講する院生が集まり、この授業の方向性・進め方について討議を行ない、教員側では日本史学担当の教員が中心となって社会科歴史的分野の学習指導案づくりを進めていくことを確認した<sup>3)</sup>。中学校学習指導要領における社会科の確認、附属中学校で使用している教科書の分析と検討を行なった上で、院生各自の問題関心を出し合いながら、研究授業のテーマ・単元の選定を進めた。附属中学校の年間スケジュールを踏まえ、およそ江戸時代の伊予地域の歴史に照準を合わせることが合意され、内田九州男ほか著『愛媛県の歴史』（山川出版社、2003年）の第五章「近世社

会の成立と展開」,第六章「近世伊予の町と村」を学習した。7月には附属中学校の授業を見学して刺激をうける機会を設け,教育実践力とは何か,教育実践力向上のためにはどのような力を磨かなければならないかを討議した。

夏休み中に授業目標の明確化とテーマの具体化を求めておいた上で,後学期に入ってから「江戸時代の四国遍路」をテーマに3回の研究授業を実施するという方向性が決定した。以後、『四国遍路と世界の巡礼』などの文献を講読して教材研究を進め,授業の目標と3回の授業の構成プラン等について討議を重ねた。12月に一応の指導案を作成し,1月に3回の模擬授業を行なって本番に備えた。

研究授業は附属中学校において2月9日,10日,16日の3回実施し,各回の研究授業の後に反省会をもった。見学した大学院生,附属中学校教員,大学教員から率直な批判や感想が示されて,研究授業の成果や問題点が明らかになった。最後の授業においては,研究授業に取り組んだ経験を踏まえて総括的な議論を行ない,開発した授業をさらに改善することを行った。

#### 4.開発した授業「四国遍路」

##### (1) 授業「四国遍路」

開発した授業の学習指導案を本稿の最後に掲載している<sup>4)</sup>。3時間で1つの単元となる授業である。

1時間目は,「遍路と道標」を主題としている。主な活動は,①身近な地域で行われている遍路について知る,②道標を取り上げることで歴史を身近に感じさせ,興味関心を持たせる,の2点である。2時間目は,「遍路と江戸時代の交通統制」を主題としている。主な学習活動は,①幕藩体制下での交通統制を理解する,②その中で遍路がどのような扱いであったかを考える,の2点である。3時間目は,「お接待のころ」を主題としている。主な学習活動は,①大師信仰について知る,②遍路におけるお接待の役割を考える,の2点である。

##### (2) 授業「四国遍路」の計画,実践から見えてきたこと

社会科の授業において,子どもに身につけさせなければいけないことは,次の2点であることが見えてきた<sup>5)</sup>。

①社会の出来事が何か分かること

②社会の出来事について自分の考えを述べること

①について。社会の出来事についてそれが何か分かるということには,3つのレベルがあることが見えてきた。最も基礎的なレベルは,それがいつ,どこで起こったことで,どのように展開していったかという事実そのものに関する情報を知ることである。次のレベルは,それがなぜ起きたか,その後どうなったかということが分かることである。すなわち,出来事の原因・理由や結果・影響が分かることである。そして,その上のレベルは,そのものがもつ社会全体における意味が分かることである。より高いレベルを目指す授業ほど,子どもの知的好奇心を刺激し,おもしろい授業になることということである。

②について。社会科には,社会の出来事について分かったことは何かを述べる力を育成することも求められることも見えてきた。授業では,子どもが何について納得したかを述べさせる場が必要である。子どもが述べる考えは2種類に区分される。一つは,事実がどうなっているかということについての判断である。もう一つは,その事実について自分はどう思うか,事実を踏まえて自分はどうしたいかという事についての判断である。後者の判断は,確かな根拠に基づく前者の判断が前提となっている。事実についての判断が誤っている場合は,間違いのない評価を下したり,態度を決定したりすることはできない。授業は,まずより間違いのない事実に対する判断を述べる力を保障し,そのうえで正しい評価や態度の決定ができるようにしてやるものでなければならないことも見えてきた。

すなわち,子どもに身につけさせるべき,①社会の出来事が何か分かること,②社会の出来事について自分の考えを述べること,をいかに授業において保証できるかということが重要であることに気づくこととなった。それを保証することで,社会的な見方・考え方が授業において明確に示され,子どもがその見方・考え方を習得できるようにすることも見えてきた。

#### おわりに

本研究の成果として次の3点を指摘できる。

第1は、大学院生が、研究授業を通じて、獲得すべき目標の明確化、教材研究の重要性、授業構成と重点項目の整理、表現力の強化など、社会科の授業力、特に、計画力、実践力において何が必要であるかを具体的な取り組みの中で考えることができた点である。研究授業に取り組み、準備が大変で大きなプレッシャーがかかったようであるが、その分、非常に勉強になったと回答している。もちろん1回の研究授業で直ちに授業力が身につくというようなことはありえないが、貴重な体験となったことは事実であろう。

第2は、附属中学校教員、大学教員においても、授業力の高まりが見えたことである。附属中学校教員は、特に、研究授業に対する批評でのコメントを通じて、自分自身の授業を評価しながら、大学院生の研究授業を評価していった。それは、まさに、社会科授業の評価力を高めることとなった。また、大学教員は、院生に指導する中で、授業を再構成することを磨いていった。これは、社会科授業の改善・再構成力の向上であった。

第3は、四国遍路を題材とする一つの授業実践例を提示したという点である。調べてみると、これまで中学校社会科において四国遍路をテーマとした授業実践例がほとんど存在しないことが判明し、手探りで授業を作り上げていくしかなかった。四国遍路については最近様々な研究成果が発表されており、それを吸収しつつ、複雑な内容に深入りすることなく、かつポイントを押さえながら授業を作り上げていくのは非常に難しいところであるが、初めての試みとして貴重なものとなった。

## 【註】

- 1) 本研究は、教育学部長裁量経費「学部・大学院教育を通じた学生・附属学校教員・大学教員の社会科授業力の向上に関する研究」による成果の一部を報告するものである。
- 2) 谷田部玲生（研究代表）『社会科系教科における現職教員の授業力向上プログラム作成のための研究』国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部、2009年3月、p. 8。鴛原はこの研究に分担者として参画した。

3) 本研究においては、「社会科教育実践研究」全般の中心的役割を川岡が務めた。福田は、大学院担当ではなかったが、社会科教育、特に歴史教育の研究成果を生かし、院生の授業づくりに関しての指導等に当たった。鴛原は、学部長裁量経費の研究代表者として研究をまとめ、本稿全般の調整を行った。

4) 掲載している学習指導案は、研究授業を経て、さらに改善をしたものであり、研究授業時に用いたものとは異なっている。授業において用いている主な参考文献は次のようである。

- ・中村幻児（監督）『ロード88』アミューズソフトエンタテインメント、2005年、111分。
- ・宮崎建樹『四国遍路ひとり歩き同行二人』へんろみち保存協力会、1990年
- ・松山市教育委員会『松山の道標』松山市役所、1999年
- ・愛媛県『伊予の遍路道』愛媛県生涯学習センター、2002年

5) 前掲2), p.88。

## 【付記】

本研究の、特に、研究授業やその批評、改善に当たっては、教育学部附属中学校の、西田剛志先生、白石泰敏先生(当時)、宮本真人先生にご協力をいただいた。また、社会科教育実践研究の受講者であった、教育学研究科教科教育専攻社会科教育専修の筒本和隆君、張楠楠君、所亮至君、野本竜広君、渡部健矢君には、本研究全般にわたり協力を得た。附属中学校の社会科の先生方と大学院生の協力に対して、記して感謝したい。

## 社会科学習指導案

単元名 身近な地域にある歴史「四国遍路」

### 単元の目標

本単元では身近な地域の歴史を、江戸時代に盛り上がりを見せた遍路を教材として学習する。遍路を扱うことで、生徒の歴史への興味関心を高めるだけではなく、自らが生活する地域への興味関心を高め、意欲的に関わっていくことができるようにする。(関心・態度・意欲) 遍路の歴史的背景や思想を取り上げることで、多面的・多角的に事象を捉えられるようにする。(思考・判断) 文献や写真を取り上げ、資料からどのようなことが読み取れるのか分析できるようにする。(技能・表現) 複数の藩にまたがる地域で行われる遍路が江戸時代にどのように扱われたのかを理解することで、諸藩による交通統制に関する知識を身につける。(知識・理解)

### 単元指導計画

	主題名	主な学習活動	時間
1	遍路と道標	・身近な地域で行われる遍路について知る ・道標を取り上げることで歴史を身近に感じさせ、興味関心を持たせる	1
2	遍路と江戸時代の交通統制	・幕藩体制下での交通統制を理解する ・その中で遍路がどのような扱いであったのか考える	1
3	お接待のころ	・大師信仰について知る ・遍路におけるお接待の役割を考える	1

### 本単元の指導観

#### (1) 教材について

遍路は四国で行われている巡礼であり、生徒の生活圏でも、札所やそこを巡礼する遍路の姿、あるいは、遍路に関する遺跡等が存在している。江戸時代には参拝者数が盛り上がりを見せている。その歴史については、現在研究が進められており未だ明らかになっていないところが多いが、本単元の目標を達成するには適した教材であると言える。

#### (2) 指導の工夫と評価について

本単元で扱う遍路は、資料が多く存在する。授業では生徒の興味関心を惹くために、体験記のような文献だけではなく、視聴覚教材として映像資料や写真を用意し、適当な場面で用いる。またこれらを単に見るだけではなく、どのようなことがわかるのか等を考えさせることによって、資料を活用する能力を育てる。評価は、グループ活動での議論への参加の様子や、ワークシートの内容を重視したい。

社会科学習指導案 1 時限目

主 題 名	遍路と道標				
本 時 の 指 導 目 標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遍路に関する知識を身につけることができる。</li> <li>・ 道標に書かれた言葉が何を意味しているのか理解し、なぜそれが作られたのかを考えることができる。</li> <li>・ 身近な地域に歴史事象があることを知り、地域の歴史への興味関心を高めることができる。</li> </ul>				
本 時 展 の 指 導 開 過 程	指 導 内 容	時間	留 意 点	資 料 等	
	導 入	1 遍路について ・ 札所 ・ 空海	7	・ 弘法大師信仰や宗教について深入りしない。	・ 映像資料 (スクリーン) ・ 教科書P42 (東京書籍)
		2 写真の石が何なのか考える ・ 写真のみで考える ↓ ・ 碑文を参考に考える	8	・ ヒントを与えすぎないようにする。 ・ 道標について知っていること、気づいたことを発表させる。	・ パワーポイント (以後PP) 3 枚目, 4 ~ 5 枚目
		3 碑文 (道標に関する部分) について ・ 場所の名前 ・ 手印 ・ 距離	13	・ 蛍光ペンを用いてわかりやすく整理させる。 ・ 距離については現在との比較を行う。	・ PP 6 ~ 8 枚目
		4 碑文 (それ以外) について ・ 名前 ・ 年号 ・ 願い	12	・ 蛍光ペンを用いてわかりやすく整理させる。 ・ 年号については建立年のグラフで江戸時代頃に整備が進んだことを示す。 ・ 願いについてはプリントの碑文以外にも紹介する。	・ PP 9 ~ 11 枚目
		5 道標の場所 ・ 中学校から最も近い道標	5	・ 一つの道標を取り上げ時代・願いを見る。	・ PP12枚目
		6 本時の学習のまとめ ・ 最近の道標	5	・ 現在までのつながりに気付かせる。	・ PP13 ~ 14 枚目



フリント①の答え

弘法大師(空海)  
☞教科書P42

八十八か所

写真の石は何？



この石の正体は…

みち しるべ  
『 道 標 』

なぜそう思いましたか？

- ・ 距離
- ・ 場所の名前
- ・ 手の印

碑文を蛍光ペンで塗ってみよう♪

距離・場所・手の印



●距離の表し方●

1里 … 約(4000)メートル  
1町(丁)…約(110)メートル  
1間 … 約(2)メートル  
1尺 … 約(0.3)メートル  
1寸 … 約(0.03)メートル

距離・場所・手の印  
意外に何が書かれていますか？

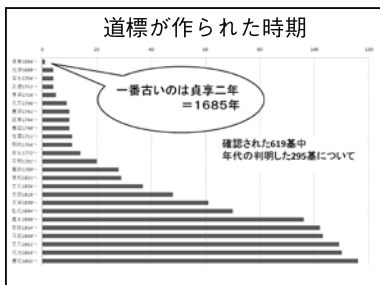
名前・年号・願い

碑文を蛍光ペンで塗ってみよう♪

名前⇒

年号⇒

願い⇒



道標に込められた願い

【 村中安全 】

その他にも…

- ・亡くなった人(祖先)のための供養
- ・遍路の記念(中務茂兵衛)





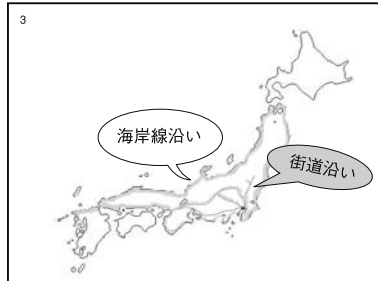
社会科学習指導案 2時限目

主 題 名		遍路と江戸時代の交通統制			
本 時 の 指 導 目 標		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遍路が江戸時代の交通統制下でどのように扱われたのかを理解することができる。</li> <li>・ 番所切手と往来手形に書かれていることを理解し、遍路の中でどのような役割を担っていたのか理解できる。</li> <li>・ 遍路の交通の様子から、四国諸藩による交通統制に関する知識を身につけることができる。</li> </ul>			
本 時 の 展 開 指 導 過 程	指 導 内 容		時 間	留 意 点	資 料 等
	導 入	1 江戸時代の交通 ・ 江戸時代の交通が盛んなのはどこか ・ 四国の行政区分	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 四国の交通に関する記載が教科書にないことに気づく。</li> <li>・ 四国の藩の概要を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教科書 p 99</li> <li>・ プリント 1-①,②</li> <li>・ パワーポイント (以後PP) 1～5 枚目</li> </ul>
		2 遍路の交通 ・ 江戸時代の遍路の四国上陸 ・ 四国内での遍路の移動	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各地から渡航する際の上陸地を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プリント 2</li> <li>・ PP 6 枚目</li> </ul>
		3 江戸時代の交通統制について① ・ 番所の役割	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 設置される場所を説明する。</li> <li>・ 番所の役割を発問する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プリント 1-③</li> </ul>
		4 江戸時代の交通統制について② ・ 伊予松山藩と他藩との比較	15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 四国諸藩共通の特色を説明する。</li> <li>・ 伊予松山藩の遍路規制と優遇政策の特色を説明する。</li> <li>・ 他藩との比較をさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プリント 1-④</li> <li>PP 7～10枚目</li> </ul>
		5 江戸時代の交通統制について③ ・ 番所切手と往来手形	15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 番所切手と往来手形の読み取り。どんなことが書かれているのか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ プリント 1-⑤</li> <li>・ PP11～15枚目</li> </ul>
	整 理	6 本時の学習のまとめ ・ 学習内容の確認	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 番所が遍路の中でどのような役割を担っていたのか整理する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ PP16枚目</li> </ul>

2

**江戸時代の交通**

**どんなところの交通が盛んだろうか？**



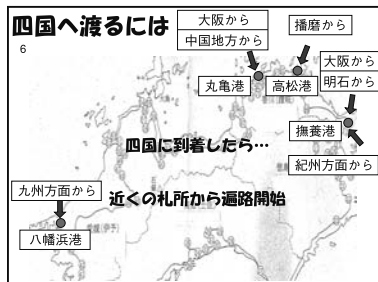
4

**四国の行政区分**

愛媛県は(伊予)、香川県は(讃岐)、徳島県は(阿波)、高知県は(土佐)と呼ばれた。

5

愛媛は(伊予松山)(大洲)(宇和島)(今治)などの藩があり、香川は(丸亀)(高松)。  
徳島は(徳島)藩、高知は(土佐)藩。  
(城持ちの大きな藩)



8

**番所はどういうところに設置されるのかというと…**

**藩境や交通の重要なところに設置される**

9

番所は何をすところ？  
予想のところに書いてみよう☆

- 通行料の徴収
- 物資の出入りの監視
- 通行人の監視

10

**伊予松山藩と他藩との比較**

- 遍路は道後温泉に寄り、宿泊することが多い。
- 遍路は道後で自由に泊まれた。
- 遍路は三日間に限り、入湯無料

11 **往来手形と番所切手**  
福路の往来手形



**往来手形**

途中、万一病死することであっても、藩領内の一帯に限り受け取れるが、その領内に上り下りして、この領を通過する場合は、縁で往來の手形を

12


万一病死等仕候節  
 者国元へ御届二不及

万一、病死などつかまつり  
 たりそう節は国元へ御届けにおよばず

どんな意味だろう？

万一、病死した場合には、(その者の)故郷へ知らせる必要はありません。

13 **なんらかの理由で故郷を追われた人に発行される往来手形のことを**



**捨て往来の手形**とも言う

14 **番所切手**

印) 切手 武州旗本郡中栗良村  
 一、瀬路氏人 彦兵衛 重藏

但し、三月十四日甲ノ浦東段於御番所ニ相改  
 今日日数三十日限り松尾坂江参着之宮  
 右之通委細申合ヌ候矣、尤村々ニ猶又参入相メ  
 可申候、尤所願路之義者御法度之旨申候也

申ノ月十四日 和田惣右衛門 印  
 甲浦 松尾坂江参着  
 印) 順路通筋庄屋衆中  
 右武人 三月十四日 伏見御番所口入也  
 右武人 三月十五日 出申候

15

日数三十日に限り松尾坂へ参着のはず

日数30日以内に松尾坂へ到着するはずである。

意味は？

甲浦と松尾坂は「プリント」から

16 **まとめ**

- ・番所による監視・統制
- ・四国各藩で日数や旅路の指定などの制限

社会科学習指導案 3時限目

主題名	お接待のこころ			
本時の指導目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お接待とは何かを理解する。</li> <li>・お接待の背景にある大師信仰を理解する。</li> <li>・お接待が、今も昔もお遍路さんを支えているということを理解する。</li> </ul>			
本時の指導の過程	指導内容	時間	留意点	資料等
	1 お接待とは何かを知る。 2 現代のお接待を知る。	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・津田文平『お遍路さんと呼ばれて』を紹介する。</li> <li>・お接待を受ける時の作法を紹介する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プリント②</li> <li>・プリント①</li> </ul>
	3 江戸時代のお接待を知る。 ・野中彦兵衛の受けたお接待を見る。 ↓ ・お接待が遍路の費用の軽減していたことを知る。	15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料の内容を、地図等を使って細かく説明する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プリント①</li> <li>・プリント①</li> </ul>
	4 大師信仰について学ぶ。 ・お遍路さんを空海と見立ててお接待をしていることを知る。 ↓ ・大師信仰によるお接待の例を説明する。 ・大師信仰の表れとして、大師伝説を紹介する。	15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・杖の淵公園にまつわる大師伝説を紹介する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プリント②</li> <li>・写真 (スクリーン)</li> </ul>
	5 本時の学習のまとめ ・お接待は、江戸時代には費用の面で、今は精神面でお遍路さんを支えているとまとめる。	7		<ul style="list-style-type: none"> <li>・プリント②</li> </ul>

3時限目 プリント①

(津田文平『お遍路さんと呼ばれて～四国1200キロ歩き旅』より)

7月1日(木)

歩き疲れて、小さな交差点の角の民家の庭石に腰を下ろして一服した。近くの家から軽自動車が出てきて、運転していた奥さんふうの女性私を見て頭を下げながら通り過ぎた。再び歩き始めて、かなり行ったところだ。さっきの軽自動車が横に止まって女性が運転席の窓を開けた。

「これ飲んで元気出してください」

見るからに冷たそうな500ccのお茶のペットボトルを差し出したのだ。

庭石に座り込んでいた私を見て、お茶を買ってきたのは間違いない。とっさのことで、「すみません、ありがとうございます」しか言えない。あわてて、「せめてお札を」と頭陀袋からお札を取り出して渡し「南無大師遍照金剛」と唱えた。お札を受け取った女性は、とびきりの笑顔を見せて走り去った。その車を見送りながら「なぜ、ご家族の幸せをお祈りいたします、と付け加えなかったのか」と後悔した。冷たいお茶をもらったというより、その心遣いに元気付けられ、黙々と歩くことにした。

江戸時代のお接待 ～ 野中彦兵衛が受けたお接待～

武蔵国(今の埼玉県)に住んでいた野中彦兵衛は、天保7(1836)年に四国遍路を行い、その道中、50回もの接待を受けた。表は現在の松山市で受けたお接待を整理したもの。



日付	接待場所	接待品
3月27日	八坂寺下	豆入り飯
	場所不明	赤飯・大根漬2切
	浄土寺境内	焼米
	場所不明	白米・おひたし
	石手寺	赤飯2・汁
3月28日	道後	赤飯・大根漬1本
	太山寺境内	白米・野菜

(『遍路のころ』より)

気づいたこと・思ったことを書いてみよう

お遍路さんにとってのお接待

お接待は、お遍路にかかる( )を減らした。

→ 身分の( )人々にもお遍路を可能にした。

3時限目 プリント②

お接待とは？

お接待を受ける時の作法：

大師信仰とは？

[Blank box for notes]

お接待させて  
下さい



お接待



[Blank box for notes]

例えば

- ・
- ・

まとめ

お接待は、

(江戸時代) お遍路さんを ( ) の面で支えた。

( 今 ) お遍路さんの ( ) を支えている。